

[B年] 公現後第8主日(2022年2月27日)**【旧約聖書日課】 ヨナ書 1章1節～2章1節**

1 主の言葉がアミタイの子ヨナに臨んだ。² 「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている。」³しかしヨナは主から逃れようとして出発し、タルシシュに向かった。ヤッファに下ると、折よくタルシシュ行きの船が見つかったので、船賃を払って乗り込み、人々に紛れ込んで主から逃れようと、タルシシュに向かった。

⁴主は大風を海に向かって放たれたので、海は大荒れとなり、船は今にも砕けんばかりとなった。⁵船乗りたちは恐怖に陥り、それぞれ自分の神に助けを求めて叫びをあげ、積み荷を海に投げ捨て、船を少しでも軽くしようとした。しかし、ヨナは船底に降りて横になり、ぐっすり寝込んでいた。⁶船長はヨナのところに来て言った。

「寝ているとは何事か。さあ、起きてあなたの神を呼べ。神が気づいて助けてくれるかもしれない。」

⁷さて、人々は互いに言った。

「さあ、くじを引こう。誰のせいで、我々にこの災難がふりかかったのか、はっきりさせよう。」

そこで、くじを引くとヨナに当たった。⁸人々は彼に詰め寄って、「さあ、話してくれ。この災難が我々にふりかかったのは、誰のせいだ。あなたは何の仕事で行くのか。どこから来たのか。国はどこで、どの民族の出身なのか」と言った。

⁹ヨナは彼らに言った。

「わたしはヘブライ人だ。海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者だ。」

¹⁰人々は非常に恐れ、ヨナに言った。

「なんという事をしたのだ。」

人々はヨナが、主の前から逃げて来たことを知った。彼が白状したからである。

¹¹彼らはヨナに言った。

「あなたをどうしたら、海が静まるのだろうか。」

海は荒れる一方だった。¹²ヨナは彼らに言った。

「わたしの手足を捕らえて海にほうり込むがよい。そうすれば、海は穏やかになる。わたしのせいで、この大嵐があなたたちを見舞ったことは、わたしが知っている。」

¹³乗組員は船を漕いで陸に戻そうとしたが、できなかった。海がますます荒れて、襲いかかってきたからである。¹⁴ついに、彼らは主に向かって叫んだ。

「ああ、主よ、この男の命のゆえに、滅ぼさないでください。無実の者を殺したとって責めないでください。主よ、すべてはあなたの御心のままなのですから。」

¹⁵彼らがヨナの手足を捕らえて海へほうり込むと、荒れ狂っていた海は静まった。¹⁶人々は大いに主を恐れ、いけにえをささげ、誓いを立てた。

² さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。

【使徒書日課】 ヘブライ人への手紙 2章1～4節

¹だから、わたしたちは聞いたことにいっそう注意を払わねばなりません。そうでないと、押し流されてしまいます。²もし、天使たちを通して語られた言葉が効力を発し、すべての違犯や不従順が当然な罰を受けたとするならば、³ましてわたしたちは、これほど大きな救いに対してむとんちゃくでいて、どうして罰を逃れることができましょう。この救いは、主が最初に語られ、それを聞いた人々によってわたしたちに確かなものとして示され、⁴更に神もまた、しるし、不思議な業、さまざまな奇跡、聖霊の賜物を御心に従って分け与えて、証ししておられます。

【福音書日課】 マルコによる福音書 4章35～41節

³⁵その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。³⁶そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。³⁷激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。³⁸しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。³⁹イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり風になった。⁴⁰イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」⁴¹弟子たちは非常に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ヨナ書 1章1節～2章1節

1 主の言葉がアミタイの子ヨナに臨んだ。²「立って、あの大きいなる都ニネベに行き、人々に向かって呼びかけよ。彼らの悪が私の前に上って来たからだ。」³しかし、ヨナは立ち上がると、主の御顔を避け、タルシシュに向けて逃亡を図った。彼がヤッファに下ると、タルシシュ行きの船が見つかったので、主の御顔を避けてタルシシュへ行こうと、船賃を払って人々と共に船に乗り込んだ。

⁴だが、主が海に向かって大風を起こされたので海は大しけとなり、船は今にも砕けそうになった。⁵船乗りたちは恐怖のあまりそれぞれの神に向かって叫び、海に積み荷を投げ捨て、船を軽くしようとした。一方ヨナは、船底に降りて横たわり、寝入っていた。⁶やがて、船長がヨナのところに来て言った。

「なぜ寝ているのか。さあ起きて、あなたの神に呼びかけなさい。神は我々のことを顧み、滅ぼさずにおかれるかもしれない。」

⁷人々は互いに言った。「さあ、この災いが我々に降りかかったのは誰のせいなのか、くじを引いて確かめよう。」そこで、彼らがくじを引くと、ヨナに当たった。⁸彼らはヨナに言った。「さあ、我々に話してほしい。この災難が我々に降りかかったのは、誰のせいなのか。あなたの仕事は何か。あなたはどこから来たのか。国はどこで、どの民の出身なのか。」⁹ヨナは彼らに言った。「私はヘブライ人です。海と陸とを造られた天の神、主を畏れる者です。」¹⁰人々は非常に恐れ、ヨナに「あなたは何をしたのか」と言った。ヨナが、主の御顔を避けて逃亡したことを伝えたので、人々はその経緯を知った。

¹¹彼らはヨナに言った。「あなたをどうすれば、海は静まるだろうか。」海は依然として荒れ狂ったままであった。¹²ヨナは言った。「私を担いで、海に投げ込んでください。そうすれば海は静まるでしょう。この大しけがあなたがたを襲ったのは、私のせいだと分かっています。」¹³人々は船を漕ぎ、陸に戻そうとしたが、できなかった。海は彼らに

逆らって荒れ狂ったままであった。¹⁴ついに、彼らは主に向かって叫んだ。「ああ、主よ、この男の命のために、我々を滅ぼさないでください。無実の者を殺すという血の責めを我々に負わせないでください。あなたは主、思いのままになさるお方です。」¹⁵こうして、彼らがヨナを捕らえ、海に投げ込むと、海は荒れるのをやめた。¹⁶人々は非常に主を畏れ、いけにえを献げて誓いを立てた。

2 主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませたので、ヨナは三日三晩その魚の腹の中にいた。

ヘブライ人への手紙 2章1～4節

¹だから、私たちは押し流されないように、聞いたことにいつそう注意を払わねばなりません。²天使たちを通して語られた言葉が確かなものとなり、あらゆる違犯や不従順が当然の報いを受けたとすれば、³私たちは、これほど大きな救いをないがしろにして、どうして報いを逃れることができましょう。この救いは、主が最初に語られ、それを聞いた人々が私たちに確かなものとして示しました。⁴さらに神も、しるし、不思議な業、さまざまな奇跡により、また、御心に従い聖霊の賜物を分け与えることによって、証ししておられます。

マルコによる福音書 4章35～41節

³⁵さて、その日の夕方になると、イエスは弟子たちに、「向こう岸に渡ろう」と言われた。³⁶そこで、彼らは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。³⁷すると、激しい突風が起こり、波が舟の中まで入り込み、舟は水浸しになった。³⁸しかし、イエス自身は、艫の方で枕をして眠っておられた。そこで、弟子たちはイエスを起こして、「先生、私たちがおぼれ死んでも、かまわないのですか」と言った。³⁹イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり風になった。⁴⁰イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信仰がないのか。」⁴¹弟子たちは非常に恐れて、「一体この方はどなたなのだろう。風も湖さえも従うではないか」と互いに言った。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・2月27日「公現後第8主日」の日課主題は「奇跡を行うキリスト」。今期の「公現後」最後の主日で、この週の水曜日(灰の水曜日)から「受難節」に入る。「公現後」最終主日の聖書日課は各サイクルごとに固定されている。

・旧約日課は、「ヨナ書」から、冒頭の嵐の海にヨナが投げ込まれる場面までの箇所。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、序盤で「聞いてきたことの理解に注意を向けるべきこと」を促す箇所の一部。福音書日課は、「マルコ福音書」から、主イエスが弟子たちと湖を渡られたときに嵐に遭遇した逸話を伝える箇所。

旧約日課(ヨナ 1~2 章より)

・「ヨナ書」は、ユダヤ教正典「後の預言者」中「十二小預言者」の5番目に置かれた預言書。他の預言書とは異なり、「預言集」の部分を含まず、全体が「預言者の物語」として構成されている。登場する預言者「アミタイの子ヨナ」は、「列王記下」14章に北王国イェフ王朝ヤロブアム王(在位=前786~746年ごろ)の時代の預言者として描かれている(王下14:25)。それによれば、預言者ヨナは、ヤロブアム王がイスラエルの領土を回復することを預言として告げていた。これをもって、預言者ヨナを「愛国主義者」、「イスラエル至上主義者」、あるいは「体制迎合の御用預言者」と見る学者もいるが、そうとは言えない。「列王記下」で、ヨナの出身地は「ガト・ヘフェル」とされているが、ここは、預言者エリシャを支援していたとされる女性一家の居住するシュネムに近い町。「列王記下」は、ヨナを登場させる少し前にエリシャの死を描いており、エリシャの率いていた預言者集団連合に属する者として位置づけられていると考えられる。この時代は、アッシリアの勢力が後退していたことによって北王国も支配領域を拡張することができていたが、ヤロブアム王治世の終わり軌を一にしてアッシリアで新しい王ティグラト・ピレセルが即位(前744年ごろ)すると、まもなく覇権国としてエジプトに迫る領域までを支配下に置くようになった。北王国は、このアッシリアの侵攻によって前722年ごろ滅亡している。「小預言者」中、「預言者アモス」および「預言者ホセア」は、ヤロブアム王時代から北王国滅亡までの時期に北領域で活動していたとされるが、「預言者ヨナ」を彼らに先行する預言者として位置づけられていると推認されるのである。

・「ニネベ」は、アッシリアの首都で、前612年にバビロニア・メディア連合軍の侵攻によって陥落し破壊されるまで、繁栄した。ヨナの時代より下るが、前6世紀のアッシリア王アシュル・パニパル(在位=前668~627年ごろ)は、ニネベに大図書館を造営し、支配域全域からあらゆる文物を収集したとされ、当時のアッシリア支配域の文献記録(粘土板)は現在でも遺跡発掘が続けられている。

・ヨナが逃亡を図った先の「タルシシュ」は、旧約中繰り返し現れる地名で、「タルシシュの船」という表現が用いられて地中海貿易上、重要な拠点都市であったことが推測されるが、厳密な地理上の位置は特定されていない。アナトリア半島南東部の「タルソス」、またはイベリア半島の「タルソッテス」が候補地として考えられている。後者(タルソッテス)は、金属の産地として知られていた。

・ヨナの物語は、王宮預言者の記録として保存されたものとは考え難く、「エリヤ伝承物語」や「エリシャ伝承物語」と同様に、預言者集団が拠点としていた地方で民間伝承的に伝承されていたものが収集され、文書化されたものと推察される。伝承物語に特有の誇張された描写や劇的な展開は、史実の記録としての信憑性は低いと言わざるを得ないが、「預言者」という宗教家に対する特別な崇敬が背景にあつてのことと考えられる。これを、バビロン捕囚期以後の南王国系譜の祭司・預言者集団が採録して正典中に収めたのは、「預言者」のあるべき姿を示す材料として適当とみなされたからだろう。この物語は、あきらかに「イスラエル至上主義」を否定しており、異邦人を支配し救いの対象とする絶対的な神観を示すものともなっている。

使徒書日課(ヘブライ2章より)

・「ヘブライ人への手紙」は、新約正典中「公同書簡」に分類される書簡形式の文書。冒頭にあるべき書簡としての体裁(宛名、差出人名、挨拶など)が欠けているのに対して、末尾の挨拶などは残っており、冒頭部の欠落の理由は不明。末尾の挨拶文などから、「パウロ書簡」の一つに数えてきた教派もあるが、西方教会では著者不明として扱われることが一般的。書簡形式ではあるが、特定の教会と差出人の関係性や事情をうかがわせる記述は、末尾挨拶を除いて見られず、当初から、諸教会を回覧する書簡形式の「説教」として作成されたものと考えられる。

・本書は、全体としてキリスト信仰の立場からの「(旧約)聖書論」を展開するものとなっている。殊に、旧約聖書を予型論的に位置づけてキリストの出来事を解釈する立場を取り、「大祭司キリスト論」に基づいて旧約聖書に基礎づけられた「贖罪論」を示していることが、他の新約文書には無い特徴となっている。

・日課箇所は1~2章にかけて展開する序論の一部である。ここの序論部では「天使(御使い=アンゲロス)」が繰り返し取り上げられ(10例)、一種の「天使論」の様相を呈している。「天使」は、旧新約全般で現れるが、必ずしも一様の理解で描かれているわけではない。本書では、「天使」を天的な存在として特別視しながらも、「御子」がそれに優る存在であることを示すための比較対象として「天使」が取り上げられている。一方、旧約聖書の「御使い」は、ときに「主」と区別のつかない存在として現れ、その人に似た姿によって人と出会うものとして描かれている(創18章など)。

福音書日課(マルコ 4 章より)

・日課箇所は、「嵐の出来事」と呼ばれる箇所。共観福音書が共通で伝えているが、置かれている文脈が「マタイ福音書」と他の二つの福音書と異なる。主イエスが弟子たちと湖を渡って行く際の逸話には、「イエスの湖上歩行の出来事」として知られる逸話もあり、こちらも共観福音書が共通で伝えている。主イエスのガリラヤ伝道は、ガリラヤ湖北端の町カファルナウムを拠点にして、この湖を漁場とする漁師たちを弟子とすることから始められたもので、ガリラヤ湖を舟で渡って行くことは日常的な移動手段だったと考えられる。そのような日常で弟子たちが体験した中に、奇跡と受けとめられるような出来事が起こっていても不思議ではない。しかし、それを信仰の体験として語り、伝承物語として整えていく過程では、おそらく、旧約の中で扱われる「水」や「舟」に関連する物語が重要な示唆を与え、物語構成や語り方に影響を与えたものと考えられる。日課箇所に関して言えば、「ヨナ書」に描かれる嵐の場面から影響を受けた蓋然性は極めて高い。

・「ヨナ書」の嵐の場面との類比を見てみる。船(舟)には、もちろん操船の専門家が乗船しているが、その彼らをしても転覆難船を危惧させるほどの嵐に襲われ、乗船者は皆、一種のパニック状態に陥るが、その中で一人慌てることも無く眠っている者(ヨナ、イエス)がいる。乗船者らは、この嵐の危機に一丸となって対処すべく眠っている者を起こすが、起こされた者は、冷静に事態を見極め、嵐の治め方を示し、事実、嵐を静まらせることに成功する。「ヨナ」の場合と「イエス」の場合で異なるのは、最終的にヨナは海に投げ込まれ、大きな魚に呑み込まれて三日三晩を暗黒(=死の世界!)で過ごすのに対して、イエスは自らはもちろん誰も海に投げ込まれたり、死を味わったりすることはない、という点である。しかし、この点については、主イエスが十字架刑によって死に陰府に降られた、と語られるところまで大きく物語を拡大解釈すれば、同じ構図が隠されていることが分かる。この隠された構図こそ、主イエスが「ヨナのしるし」(マタイ 12:39、同 16:4、ルカ 11:29)と言われた事柄に当たるのであるが、「マルコ福音書」は他の福音書と異なり、そのことを明示してはいない。

・「ヨナのしるし」を明示的にしない「マルコ福音書」は、この「嵐の出来事」を、乗船者全員が無事に陸地に辿り着いた「ノアの洪水物語」や、エジプト軍に負われた民が葦の海を渡って行った「出エジプト物語」などを予型とする出来事としても位置付けようとしているのかもしれない。主イエスを、神の御業を神同様にを行う者として提示することが目的であるならば、「ノアの洪水物語」や「出エジプト物語」こそ、神が水や風を支配され人を救いもし、滅ぼしもする力を行使される方として描かれているからである。

来週の誕生日 (2月27日～3月5日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-357 番「力に満ちたる」(= I 77 番「み神はちからの」)は、22歳で早世した18-19世紀英国の詩人 H. ホワイトが、ドイツのカトリック讃美歌集(1784年版)で「アヴェ・マリア、光り輝く暁の星よ」に付されていた曲に合わせて作詞した讃美歌。
- ・21-57 番「ガリラヤの風がおる丘で」(= III 5 番)は、横浜指路教会で受洗し銀座教会員として長く歩んだ別府信男が中高生キャンプのために作詞し「ともにうたおう」の歌詞公募に応募して採用された歌詞に、カトリック信徒の作曲家・蒔田尚昊が曲を付した。
- ・21-446 番「主が手を取って起こせば」は、教団牧師・今駒泰成が「ともにうたおう」(1976年発行)編纂に先立つ歌詞公募に応募した歌詞。今駒が盲人キリスト教伝道協議会の働きに従事する中で着想した。今駒の歌詞は、他に58番「み言葉をください」など。曲は、この歌詞のために、カトリック信徒の作曲家・新垣壬敏が作曲。新垣の曲は、他に5番「わたしたちは神の民」や81番「主の食卓を囲み」など。

21-357「力に満ちたる」

The Lord of our God is clothed with might

1. The Lord our God is clothed with might, / The winds obey His will; / He speaks, and, in His heavenly height, / The rolling sun stands still.
2. Rebel, ye waves, and o'er the land / With threatening aspect roar; / The Lord uplifts His awful hand, / And chains you to the shore.
3. Howl, winds of night, your force combine; / Without His high behest, / Ye shall not, in the mountain pine, / Disturb the sparrow's nest.
4. His voice sublime is heard afar, / In distant peals it dies; / He yokes the whirlwind to His ear, / And sweeps the howling skies.
5. Ye nations, bend, in reverence bend; / Ye monarchs, wait His nod, / And bid the choral song ascend / To celebrate your God.